

定例研究会要旨

日時：平成 26 (2014) 年 5 月 21 日 18:10~20:10

会場：東京外国語大学 語学研究所

題目：「フランス語話し言葉に現れる *parce que* 節の多義性について」

発表者：秋廣尚恵 (東京外国語大学大学院総合国際学研究院講師 / フランス語学)

Parce que には、大きく分けて、以下の 2 つの用法があるとされている。

1. *Pierre est parti PARCE QU'il était malade*
病気だったから、ピエールは帰った。
2. *Pierre doit être là, PARCE QUE sa voiture est garée dans le parking.*
ピエールは居るに違いない。彼の車が駐車場にあるから。

以下のテストにより、以上の 2 つの用法は統語的なレベルにおいて、区別される。

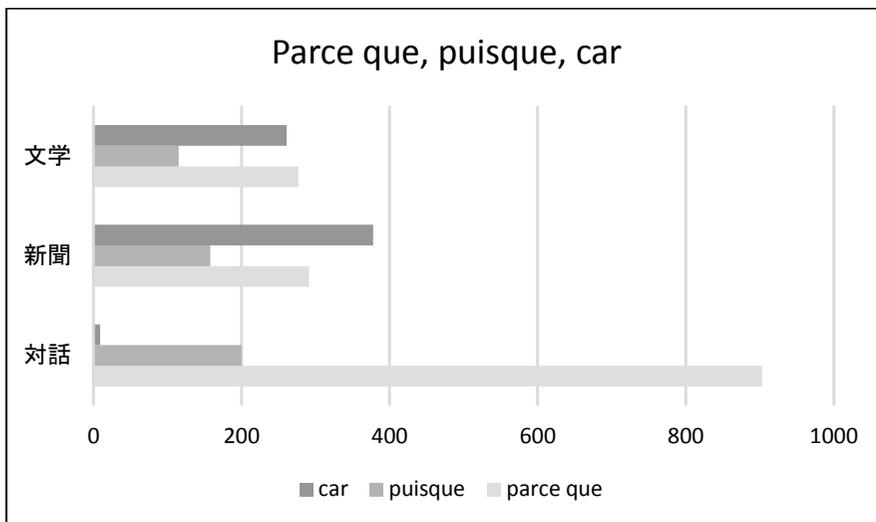
統語的操作	1 の用法の <i>Parce que</i>	2 の用法の <i>Parce que</i>
<i>C'est... que</i> 強調構文に置くことが可能.	可能	不可能
副詞による修飾が可能.	可能	不可能
<i>Que</i> により、受けなおしが可能.	可能	不可能
他の <i>Parce que</i> 節との等位接続が可能.	可能	不可能

1 は主節の動詞の支配下に置かれる従属節としての性格を持ち、2 は、主節の動詞の支配下から独立した談話的コネクターとしての性格を持つ。また、意味的には、1 の用法が、主節で表された事実の理由を表すものであるのに対し、2 の用法は、主節の発話行為に対して、なぜそのようは発話行為を行ったのかという根拠や正当化を表している。

従来の伝統文法では、*parce que* の用法の 1 を主たる用法とし、2 は 1 から生じた派生的で、非規範的な特殊な用法であるとされてきたが、1980 年代以降、*Débaixieux* を始めとす

る数々の研究において、2の用法が話し言葉ではむしろ、1よりもはるかに大きな割合で観察されることが指摘され、2つの用法を統合するような *parce que* の統一的記述の必要性が指摘されてきた。その中で、これまで伝統文法で自明の理として、考えられてきた、従属節と主節の2分法的な考え方が見直されてきている。昨今では、N. Evans の *insubordination* (非従属節化) の考え方がフランス語学でも注目を浴びており、従属節のステータスそれ自体をめぐる、様々な議論が交わされている。

今回の発表では、まず、対話コーパス、新聞コーパス、文学作品にコーパスに分けて *parce que*、及び、それと競合する「理由」を表す他の接続詞、*car*, *puisque* の用例の頻度数を調査した結果を元に、コーパスの違いによる接続詞の分布の違いについて論じた。



さらに、対話コーパスに現れる *parce que* の用法を細かく観察しつつ、1のタイプの用法であっても、主節と従属節がイントネーションや対話のターンによって切り離されている例が多いこと、また主節の要素についても、節の形ではなく、名詞句であったり、言語化されていない現場の状況であったりする例を観察した。

結論として、単純で大雑把な2分法から抜け出すためには、コーパスの観察に基づく、細かな記述が必要であること、また *parce que* の持つ特殊性を明らかにするためには、同じ理由を表す接続詞である *car* や *puisque* との比較が重要であることを指摘した。

Allaire, S. (1973). *La Subordination Dans Le Francais Parle Devant Les Micros Radiodiffusion: Etude D'un Corpus*, Klincksieck, Paris.

- Berrandonner, A.(1983). Connecteurs pragmatiques et anaphore, in *Cahiers de Linguistique Française*, 5, Université de Genève : 215-246.
- Berrandonner, A.(1991). Pour une macro-syntaxe, in Dominique Willems (ed.), *Données orales et théories linguistiques*, Paris -Louvain Duculot : 25-31.
- Blanche-Benveniste, C et al. (1990). *Le français parlé : Etudes grammaticales*, Paris: Editions du CNRS.
- Blanche-Benveniste, C et al. (2010). *Usages de la langue française*, Paris/Louvain: Peeters.
- Brunot, F. 1953, (1926) *La pensée et la langue*, Paris, Masson, 3è édition
- Canut, E. (2013). De l'apprentissage et de l'usage de la « subordination » chez l'enfant de moins de six ans, in : Débaisieux, J.-M. *Analyses linguistiques sur corpus, subordination et insubordination en français*, Paris, Lavoisier.
- Débaisieux, J.-M. (1994). *Fonctionnement de parce que en français parlé*. Thèse de doctorat en sciences du langage, Université de Nancy 2.